

桑木 厳翼

日本哲学の黎明期

西周の『百一新論』と明治の哲学界

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水

本書について

本書『日本哲学の黎明期——西周の『百一新論』と明治の哲学界』は、桑木厳翼（一八七四—一九四六）の論文集であるが、著者生前にこの本自体が発行されたのではなく、著者生前の二つの出版著書『西周の百一新論』と『明治の哲学界』を底本として、その中から選んだ論文類を一書としたものである。選んだ文章は、本書の副書名に表現したように、(1)「哲学」という訳語を考案した西周の業績と人物を紹介した文章、(2)明治の哲学界の様子を紹介した文章、(3)そしてこの二点に属する問題や話題を論じた文章である。本書巻末に「参考資料」として底本二冊のはしがき、あとがき、目次を収録してあるが、著者自身がそこで説明するように、底本の二冊にはそれぞれの本が主題とするところからやや離れた文章も少なからず収録されている。よって本書は、底本二冊それぞれが主題とするところの肝腎の文章を選び出し、新たに「日本哲学の黎明期——西周の『百一新論』と明治の哲学界」の書名を以てそれらを括ったという次第である。なお、本書の主題とした時代には括りえないが、その後の展開の一風景でもあり、また著者の日本哲学界における位置を知らしめる貴重な記録でもあるものとして、著者が参加した国際哲学会議の報告類を附録した。

著者桑木厳翼は帝国大学（後の東京帝国大学、現東京大学）でケーベル、井上哲次郎に学んだ哲学者であり、京都帝大教授、独・仏・英留学を経て東京帝大教授となり、日本のアカデミズム哲学の基礎を築いた人物である。カント研究の先駆者で、その認識論的合理主義の立場は西田幾多郎らの「京都学派」とは異なる「東京学派」とでも称すべき学風を持っていると言われている。

（書肆心水記）

目次

I 西周と津田真道あまね まみち

西周の哲学——明治初期の哲学的傾向……………14

西周の百一新論……………25

明治の一先覚者・津田真道……………63

II 明治の哲学界

明治哲学界の傾向……………78

日本に於けるドイツ哲学……………113

III 訳語の問題

哲学用語由来記……………134

言葉と哲学——現代文化の二批判……………144

IV 先進の追憶

大西 祝 ^{はじめ} 博士と啓蒙思想	156
-----------------------------	-----

森鷗外 ^{はじめ} の思想	165
------------------------	-----

附録 その後の内外哲学界

日本哲学界の傾向	172
----------	-----

日本に於けるデカルト哲学研究の現状（第九回国際哲学大会に於ける報告）	194
------------------------------------	-----

パリに於ける両国際的学会——心理学と哲学	212
----------------------	-----

参考資料 245

『西周の百一新論』序	
『西周の百一新論』目次	
『明治の哲学界』後記	
『明治の哲学界』目次	

日本
哲学の
黎明期

西周の『百一新論』と明治の哲学界

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は、桑木厳翼著『西周の百一新論』一九四〇年五月三十日発行（日本放送出版協会刊）、桑木厳翼著『明治の哲学界』一九四三年三月二十五日発行（中央公論社刊）を底本とする桑木厳翼の論文選で、書名は本書発行所によるものである。

一、各論文を括った第Ⅰ部から第Ⅳ部までと附録の部タイトルは本書発行所が設けたものである。各論文タイトルは原典のままだが、例外として「太西祝博士と啓蒙思想」の一篇のみ、原典のタイトル「太西博士と啓蒙思想」に「祝」の一字を補った。

一、底本は旧漢字、旧仮名遣い表記であるが、本書では新漢字標準字体、新仮名遣いに置き換えて表記した。但し引用文については新漢字標準字体の旧仮名遣い表記とした。

一、踊り字は「々」を除き不使用とした（二の字点は「々」に置き換えて表記した）。

一、読み仮名ルビは適宜補った。引用文への読み仮名ルビは新仮名遣い平仮名表記とした。

一、（ ）で括った行内の二行割注は本書発行所が補った便宜的な註釈である。

一、現今漢字表記されることが稀なものは、用例の多いものを中心に仮名表記に置き換えた（置き換えたものはこの凡例末尾に列挙）。但し引用文中のものはそのままに表記した。

一、外国国名などの漢字当て字は現今最も一般的と思われる表記に置き換えた。但しもともと片仮名表記されているものはそのままにしてあるので表記に若干のバラつきが生じている（例↓漢字当て字を置き換えたイタリア、底本での表記イタリー、イタリヤ）。漢字当て字を片仮名に置き換えたことに伴って付加した中黒点がある（例↓希臘羅旬／ギリシヤ・ラテン）。

一、『生性発蘊』と『生性発蘊』の表記が混在していたが、これは『生性発蘊』に統一して表記した。

漢字表記を仮名表記に置き換えたもの（五十音順に活用形・送り仮名の代表例のみ掲示）

亜米利加↓アメリカ、雖も↓いへども、英吉利↓イギリス、聊か↓いささか、伊太利↓イタリア、苟くも↓いやしくも、愈々・愈↓いよいよ、所謂↓いわゆる、印度↓インド、奥太利↓オーストリア、和蘭↓オランダ、斯く・此く↓かく、嘗て↓かつて、加特力↓カトリック、切支丹・吉利支丹↓キリシタン、希臘↓ギリシャ、基督↓キリスト、蓋し↓けだし、斯う↓こう、茲・此処↓ここ、此↓これ、この、ここ、之↓これ、是↓これ、ここ、桑港↓サンフランシスコ、併し・然し・而し↓しかし、然も・而も↓しかも、然る↓しかる、屢々・屢↓しばしば、瑞西↓スイス、瑞典↓スウェーデン、頗る↓すこぶる、乃ち↓すなわち、西班牙↓スペイン、其処・其所↓そこ、其↓その、それ、抑も・抑々↓そもそも、独逸↓ドイツ、処が（接続詞）↓ところが、処で・所で（接続詞）↓ところで、迎も↓とても、兎に角↓とにかく、兎も角↓ともかく、土耳其↓トルコ、乃至↓ないし、猶↓なお、就中↓なかんずく、紐育↓ニューヨーク、尼達蘭↓ネザーランド、伴天連↓パテレン、婆羅門↓バラモン、巴里↓パリ、仏蘭西↓フランス、白耳義↓ベルギー、伯林↓ベルリン、波蘭↓ポーランド、葡萄牙↓ポルトガル、哩↓マイル、亦↓また、儘↓まま、摩西↓モーセ、固より↓もとより、矢張り↓やはり、稍↓やや、所以↓ゆえん、猶太↓ユダヤ、欧羅巴↓ヨーロッパ、羅甸・羅典↓ラテン、羅馬↓ローマ、露西亞↓ロシア、羅曼↓ロマン、互る↓わたる（「互る」は漢字のまま）

I

西周
と
津田
真道

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

西周の哲学——明治初期の哲学的傾向

哲学という言葉が明治七年出版の西周^{あまね}著『百一新論』に於て始めて世に行われたという事は、今日に於ては周知の事実であり、随ってその意味で西氏を哲学の祖と称することに就ては、何人も異論のない訳である。もとよりこの哲学に相当するものは、この語の原語たる「フィロソフィア」の行われた泰西諸国にのみ存するのではなく、又インド、支那等の東洋諸国に限らず、日本古来の思想にもこれを求め得べきものであり、西氏もこの語を制定せざる以前に既に文久年代（^{一八六六}_{一八六三・四}）に於てもこの「フィロソフィア」の重要なことを唱道して居るし、又「希哲学」（恐らく原語の「愛智」という義に相当する「希求哲智」という意を蔵して）という語を試案したこともあるが、今日まで知られて居る文献に徴すれば、この語そのものは明治五年頃西周起草の原稿中に存するのみで、これを公けにしたのは実に前記百一新論の巻末に記したるものを嚆矢とするようである。しかしてその際の用語は全然今日の意義と一致すると言い難い点も

ないではないが、しかしながらもとよりこれを全然別種のものとすることは出来ないから、ここに歴史的發達の跡を辿ることもまた不可能でない筈である。随つて又我々は、この時代の哲学を全然無視し若しくは敵視することを以て新時代の哲学と目する觀察の、正鵠を失するものたることを先ず銘記しなければならぬ。しかも今日のいわゆる新傾向なるものが却て明治初年の先覚者の研究動機と相通ずるものあることもまた看過すべからざる所である。

そもそも哲学の定義に就ては諸説区々たる所もあり又時代国土等によつてその重きを置く所が異つて居る。大体に於て根本原理の学といい、絶対の学という点に帰着するようであるが、その原理絶対が何に關して言われるものであるか、という点に就ては必しも一定して居ない。これが、或る哲学に於て世界或は自然の原理を主題としてこれより一切を論ぜんとするのに対して、他は専ら人生の原理を対象とする如く見えるゆえんである。しかしこれは必しも正確な言表し方ではない。ギリシャ哲学が初は自然哲学の形を以て頭れ、後人生哲学を加えて完全なる体系となり、更に人生問題を主題とするようになったということ は普通に説かれる所であるが、しかしながらいわゆる自然哲学の時代に於ても全く人生問題を閑却したものではなく、寧ろ人生社会の見方が自然原理の見方を随伴したのだとする見解も存する。但しこれはやや偏倚した解釈であろうから、普通には自然若しくは本体論（存在論）等を主とするものと人生論を主とするものとの両者が区別せられると見て居るのも一理がある。しかし又これにつれて、東西の哲学に就て、西洋は自然論を主とし東洋は人生論を主とする、というような見解も行われて居つて、それには幾分當る

所があるように見えるが、しかしこれは、精密に考察すれば必しも一々の場合に妥当するとは言えない。如何なる国土に於ても、寧ろ初は広く自然の觀察に発して漸次人事に眼を転じ、更に又自然、しかして又人事というように変転するのが一般の情勢であると思われる。比較的最も人生哲学的だと称せられる支那哲学に於ても、根本原理の攻究は漸次自然哲学の方面に及んで、その中から人生論が演繹せられるようになって居る。日本の儒学に於ても、本来人生哲学的問題に重きを置くものたるに因せず、漸次原理の究明が自然哲学論若しくは形而上学を説くようになって来て、それから人生問題を説くようになった。いわゆる程朱の学併びにいやしくもこの学の影響を受けたものはこの傾向を有する、しかして形而上学の常としてそれは自然の科学的研究と反対の立場に在ることを免れない。或はその学者にして自然科学を修めるものは自から異端となつて来たのである。かくの如くしてこれ等形而上学派に反対する学派は經驗論の哲学を取り、問題の中心を自然とか実在とかいう所に置かずしてただ人事に取る所の学風になることは必然の勢である。その代表的なものは徂徠に於てこれを見るが、その行われた当時一方新興の学術として泰西より伝つた自然科学の研究が次第に勃興し、両者の間に必しも直接の關係はなかったが、しかしその精神に於て均しく実証学派に属する所があり、これが又間接に国学者の研究法とも一致して、同時に又西洋に於て十九世紀初頭の形而上学に対する十九世紀中葉の自然科学主義実証主義の精神と一致して居た。かくの如くして当時新興の科学は医学、天文学、物理学等いわゆる自然科学に限られて居て、これに応ずる哲学は明らかにそれ等自然科学者には意識せられては居なかつたけれども、この際その影響を受けた一派の学者は直

Ⅱ

明治
の
哲
学
界

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

明治哲学界の傾向

一

近頃一方では明治の思想界、引続いて少し前までの思想界が何れも皆間違った方向に行っているを見て、それを革新しようというような傾向がある。そう云う傾向を有^もって居る方から見ると、明治時代と云うものと現代と云うものとは寧ろ反対のようになって来ます。しかし例のヘーゲルの「アウフヘーベン」と云う言葉が能く流行^{はや}りますが、この「アウフヘーベン」は、ものを廃棄するということの内には、そのものが保存されると云うことが含まれて居るのだと云うのでありますから、この立場から言えば、明治も現代と全く離れたものでもありません。そう云う特別な意味を用いなくても、普通にいう歴史的発達と云うことは総て我々の生活の内にあるから、明治時代は大正を経て昭和の今日に至って居るので、そこに聯絡が

明治哲学界の傾向

あるのは、これは争うべからざることで、従つて狭い意味の現代の中にも明治が含まれて居ると言つても別に不思議でもないでしょう。もし広い意味に解釈すると、現代と云う中には無論明治も籠めて宜いと思ひます。（現代文化講座の二として講演したものであるから、かくの如き前置きを述べた）

次に哲学と云う言葉に就て一言解釈をして置かなければなりません。哲学と云うことを單に思想、哲学思想と云う風に解釈すれば、これは何人にもあります。どう云う国にも、どう云う時代にも存在して居る筈でありまして、哲学思想がないと云うことは言えず、又それが或特別な所に限られて居ると云うことは言えない訳でありますが、しかし哲学を一つの學問として考えた場合は、その哲学は一定の形式を有つて居りますから、従つてそう云うものの發達して居る所と、發達して居ない所とがある訳であります。又その形が色々な所に依り、時に依つてちがう訳であります。それで私の哲学と云うことはいわゆるフィロソフィアと云う言葉に當るものを指して言うのであります。でこの哲学が或はインドに於て起つてインド哲学となり、或は支那に於て起つて支那哲学となり、色々なになつて居るのであるが、いわゆるフィロソフィアと云うものはギリシャに起つて、そうして引續いて近世のヨーロッパ諸国に色々特別の形を以て發達している。即ちこのフィロソフィアの系統と云うものは今日イギリス、ドイツ、フランスと云う風に多少變つて居るのですが、大体一つの根源から發して、共通点を有つて居る。そのフィロソフィアが日本にも伝つて、そうして又特有の形を帯びて來た訳であります。それが即ち現代及將來の哲学となるので、これは即ちフィロソフィアの系統の一つの日本の哲学であります。そう云うものは日本のものでなくして、西洋の

II 明治の哲学界

ものだと云うように考えて居る者がありますが、日本に出来て居るフィロソフィアは日本の哲学だと思ふ。但しイギリスはイギリスの特色がある、ドイツはドイツの特色があるように、日本の哲学には支那やインドの特別な形式を有する哲学や、又日本の固有の思想が附加わつて欧米のギリシャ系哲学とは又異なる所が生じて居ることは言う迄もない。そのフィロソフィアが初めて日本に入つて来て、そうしてそれがどんな風に発達したかと云うことが我々の問題になるのでありますが、それは大体に於て明治に於て発生し、そして次等に発達したものでありますから、詰り明治哲学界の傾向と云うのはフィロソフィアの日本に於て段々発達して行く有様、そうして現在迄どう云うことになつて居つたかと云うことを述べることになるのであります。大体私の述べる範囲はそんなものであります。

二

ところでこのフィロソフィアが日本に何時頃伝わつたかと申しますと、今明治に於て発生したと申しましたが、しかし実は明治以前からフィロソフィアなるものが日本に入つて居つたことは疑を容れ^{うたがい}ない。室町時代の末にキリシタンが入つた時、そのバテレンが色々学校を設けて信徒を教育し、又信徒の内からして教職となるべき者を養成しましたが、その為には神学を教えたでありましょうし、又神学の補助学科として哲学をも教えた^{と云う}ことは考えられるのです。今日まで残つて居る文献によつてそう云うものもあつたと云うことが段々分つて居ります。しかしながら大部分の文献は滅びて居りますし、又詳しいこと

は分りませぬし、又フィロソフィアが仮りに教授されたとしてもそれは一般の民衆には関係ないことでありますから、日本にフィロソフィアが起つたと云う訳にいかない。しかし信徒の内の者が幾分かそれに就て教育を受けたと云うことは多少の証拠があるのでありまして、ずっと末のことで、江戸時代の末期ですが、或信徒が自分の告白、懺悔文を政府に提出する場合、その文章の中にプラトンとかアリストテレスと云う名称が少し変な発音ですが、書いてあります。それを以て見ると、そう云うような哲学者の名、若くは説が多少伝わって居つたと云うことも想像される。しかしそれは今申す通り一般的ではありません。その他色々西洋の学問技術が日本に入つて来ましたが、哲学は全く知られて居りません。新井白石が宣教師のシロテ（シドチ）という人に色々なことを訊ねて『西洋紀聞』と云うものを書いて居りますが、その中にキリシタンの宗門のことがあり、又神学のこと書いてありますから、もう一步進めばフィロソフィアのことに入りそうに思われますが、そこ迄は書いてない。その他ずっと後になりますが、やはり昔の先覚者の内の佐久間象山の書いたものを見ますと、これも哲学とかそう云う風な学問に就ては言つて居りません。この佐久間象山は、「東洋道德、西洋芸術」と云うことを一つのモットーのようにして居ります。道德と云うのは今日の言葉で言えば精神科学と云うことに当り、芸術と言いますのは科学、技術のことを意味するので、東洋に於ける精神上の学問に西洋の自然科学、その応用の技術と云うものを兼具て行けば宜いと云うのであって、西洋の方では道德的、精神科学的のものは余り顧みるに足らぬとしたように言葉の上では見えるのであります。その全集を見ても、砲術、大砲の製造技術の研究や、或は自然科学に関する

Ⅲ

訳語
の
問
題

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

哲学用語由来記

哲学に限らず、凡て学術にはその特有な用語が存在することは、人の^{あまね}洽く知る所である。しかるに往々にしてこの用語の普通用語と相違する所があることに就いて非難するものがあり、そしてこれは殊に哲学の場合に於て顯著であるが、しかし如何なる方面にもそれぞれ特有の用語があることは事実として何人も認めざるを得ない所であり、何れもその道に入らなければ分らぬ所があることは免れない。否、日常の言語といえども話す人と聴く人とで^{かならず}必しも同一な意味を理解して居るとは限らない。随つて学者が自分の研究や意見を發表する場合に自己独得の術語を使用することは已むを得ないであろう。それで種々新奇の言語が制作せられる訳であるから、それだけでこれを咎めることは無理と思うが、ただこの際にも一応は言語使用の目的に副うように心掛けることは肝要である。

さていわゆる言語使用の目的に副うとは、言語は本来人々の思想意志の交通を行う手段として發達した

哲学用語由来記

ものであるから、新語創作の場合にもこの点を念頭に存すべきことをいう。交通の為には先ず一般共通の性質を帯びなければならぬ、自分だけ或いは狭い仲間だけにのみ通用するものであつては十分にその目的に適わないことは明らかである。ところがこれに反する例は各人自己特有の語を製造することに於て見られる。次にそれが一般に行われるためには成るべく簡単でなければならぬ、十分意味を表すことは必要であるが、余り冗長なのは困る。これは余り長い名を子供につけて困つたという有名な落語でも明らかである。昔からそのために漢字を用いたが、近頃では碎けた雅語なども行われるが長過ぎる弊も見られる。ドイツには長い語が多いから訳すに困ることもある。訳語にも自然それが免れないこともある。しかし又同時に正確でなければならぬ。余り簡単でも曖昧で混雑を招くようなものは何の役にも立たぬ。しかも又これと共にその語は雅馴でなければならぬ。言語は単なる符号ではないから、一面には人々の趣味に適うようになつて居なければならぬ、音が悪かったり、文字面が綺麗でないと、その言葉は生活に即応しなくなる。文法に適うことと同時に音や長さが大切だが、この点にはそれぞれ人々の趣味もあろう。

しかししてこの雅馴なるためには多くの場合にその語が相当な典拠を有することを要する。もとより新語は一々古典に根拠があるようにはならぬが、しかも出来るだけは長く古典に存したものに準拠して、これを適当に結合し或は変更したものであることが望ましい。そうでないといわゆる生硬の熟字になつて仕舞う。新しい学問や学説の不人気になるのはその用語が古典的教養のある人に異様な刺戟を与えることに因ることが多い。しかし今では典拠を尋ねないで勝手に造つた方が分りよいといわれ、典拠のあるものは反てかえり

III 訳語の問題

黜^{しりぞ}けられることもある。歐洲語で新語を創作する場合にギリシャやラテンの古語を適当に組合せたりするが、それが文法的に無理があつたり、ギリシャ語とラテン語とが、乱雑に結合せられたりするためにその学に対する反感を招くこともあるのは、社会学の原語「ソシオロジー」の場合に於ても見られる。かように典拠を重ねて古語に遵うことも必要であるが、しかし新思想新学問の場合には徒らに古に泥^なむことも避けなければならない、その他その語に伴う無用の聯想を伴わないようにすることが必要である。即ち用語は純粹でなければならぬ。

かくの如く共通、簡単、正確、雅馴、典拠、純粹等の諸要件は新語創作者の一般に注意すべき点であるが、なおその他に在来^{しやう}の用語を全然別種の意味に使用することに対しても適當の注意を要する。従来長く一定の意味に使用せられた用語に対して突然別種の意義を附しては昏惑を免れない。しかるにこの例は学界殊に哲学にすこぶる多い。法律などのように漠然使用せられて居る俗語に特別な制限せられた意味を附して区別するのは或場合に必要でまた簡便かも知れないが、それでも無用の疑義を生ずることもある。純粹の理論的な学問ならば慣用の言語以外に適切な術語を發明する方が当り障りが少いように思われるが、昔から勝手な變更的解釈を施すものは多く、近來殊にこの傾向が（ドイツの學者に）存して居る。

以上一般の用語に就いて説いたが、その中自己の学説に特有な用語を創作することに就いては他からは唯一般の要件を注意するのみに止まらなければならぬが、ここに一層この要件を強調しなければならぬ場合は既存の用語を他の國語に移植する場合である。簡単に言えば訳語の場合である。これに就いては本来